

令和七年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で、または「〇〇字以内で、という指示がある場合は、「。」「、」「
「かつこ」なども一字と数えます。

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。本文の上にある数字は行数を表します。

あぶくが鳴る。からだの中と外で。

耳の中でどくどくという血管とあぶくの音が混じりあって、あたしと水のさかいめが溶けていく。もっと、潜る。鼻から息を抜き、プールの底にお腹がふれそうなくらい潜ると、くるりとからだを回転させた。水の底に仰向けになって、目をすくあげる。水面で揺れる光がまぶたのすきまから入ってくる。

光は裂けめ。ひらいたところからあふれていく。

にじみ、ゆらめく、視界。光の底に沈んでいるみたい。

あたしが初めて見た景色はこんなふうだったんじゃないかって、いつも思う。思いたくて、水に潜る。生まれなおしたみたい、まっさらな気分になれるから。

ぼやぼやと光にゆがむ世界を眺めながら浮上していく。ぽかっと水に浮かんた途端、塩素のにおいが鼻にとどく。あぶくの音も、自分の音も消える。水の膜がなくなつた世界は輪郭がはつきりとして、光はおとなしくなる。

瞬きをする。このまぶたに傷をつけてくれたひとのことをおもふ。あのひとのおかげで、あたしの目は世界を映している。

「また泳いでる」

由香里の声が降ってくる。顎をのけぞらすと、入道雲の間からのぞいた太陽がぎらっと目を刺して、スタート台の上に立つ裸足の足と制服のスカートが逆さに見えた。

15 「部活、引退したんじゃないの？ 夏期①コウシユウもさぼってさあ。一緒に都内の高校いこうって約束したじゃん」

顔は見えなかったけれど、由香里が口を尖らせているのはわかった。ときどき、考える。見えなくても伝わってくることは、いままで見てきたものを脳がなぞっているだけなのか、それとも視覚に関係なく感じとれる機能が人にはあるのか。

「引退したよ。だから、泳いでない。浮かんでいるだけ」と脚で水面を叩く。水しぶきに由香里が悲鳴をあげる。

「ちよっとやめてよー」

20 「由香里もおいでよ」

「灼けるし、メイクとれるからいや」といつもの返事。仕方なく、プールの縁に両手をつけて水からあがる。ずんつと(1)からだの重さが戻ってくる。

「そういえば、田淵ってプール授業のあとメイクしてるらしいよ。男子が言ってた」

片手に持った白ソックスをくるくるまわしながら由香里が言った。誰だっけ、と記憶をさぐると待合室のレモン色のベンチに腰かける大柄な男子が浮かんだ。

25 「男子がメイクしたっておかしくなくない？ 校則とか言うなら、由香里もしてんじゃん」

「えー、田淵だよ！ メイクするような顔じゃなくない？」

「アイドルみたいな顔じゃなきゃ、きれいを目指しちゃいけないってこと？」

30 由香里だってアイドル顔でも女優顔でもないじゃん、と言いかけて、やめた。やさしさではなく、めんどくささで。別に田淵が化粧しようがしまいがどうでもいい。「そういうのってどうなの」とは言った。

「でもさあ、田淵って女子ともつるまないし、野球の話はつかしてるじゃん。コスメとかファッションとかぜんぜん興味なさそうだから噂されんじゃないの」

由香里がへらつと笑う。「軽く言っただけじゃん」とか「みんな言ってるし」とか口にするときの笑い。

「あたしもメイクするようになったらそうやって噂されるのかな」

35 顔をそむけて言ったのに、由香里は「え、する気になった？ 買い物いこうよー！」と甲高いはしやぎ声をあげた。

「今日は一緒に帰れないから」と熱いプールサイドに濡れた足跡をつけながら更衣室へ向かう。「なんで、駅前に新しくできたジェラート屋も行ったかったのに」と由香里がついてくる。

「今日は無理」

40 そう言うと、由香里は「もしかして」とにやにやあたしをのぞき込んだ。「彼氏、できた？」

水泳帽をぬいで、びゅつと出る。「やっ」と由香里が離れた。

「なんで彼氏なの」

「じゃあ、彼女？」

(2) またね、と笑って、更衣室のドアを開けた。ちょっとカビ臭い暗闇の中、手探りでタオルを探す。目の奥で光がちかちかと揺れていた。

光は残る。あたしの目が光を知らなかったころ、きつと暗闇は完全な姿をしていたのだろう。そんなことを考えながら、肌にはりついた水着をはぐようにして脱ぐ。

学校からバスに乗り、急行が停まる大きめの駅まで行く。

同じ制服の子がいない車内はなんだか気持ちがいい。

今日は半年に一度、さやちゃん先生に会える日。ほんとうは一年に一度の診察でいいらしいけれど、心配したお母さんがお願いしてくれたおかげで、年に二回会える。電車に乗って、渋谷へ向かう。渋谷だなんて言ったら、由香里は目の色を変えてついてくるので話したことはない。さやちゃん先生に会うときはお母さんだって邪魔だ。

さやちゃん先生は、あたしの手術をしてくれたひとだ。といっても、あたしはまったく覚えていない。

あたしはまぶたがうまくひらかない赤ちゃんだったらしい。先天性眼瞼下垂という、中学生になったいまでもスマホで調べないと漢字で書けない病名で、まぶたをあげる筋肉や神経の発達異常が原因らしい。片目だけの子がほとんどらしいけど、あたしはめずらしく両目だった。

手術でまぶたはひろくようになる。ただ、三歳くらいまでに視覚刺激がないと目の機能が発達せず、生涯「視る」力がひどく弱くなったり失われたりする可能性があるそうだ。「目は赤ちゃんのときに光をたくさん入れてあげないと育たないの」と、さやちゃん先生が教えてくれたことがある。

でも、それはすべて後から知ったことで、三歳の小さなあたしはなにもわからないまま全身麻酔で手術を受けた。さやちゃん先生はあたしの薄い眉毛の下にトンネルをつくって、額の筋肉と上まぶたをつなげた。足りない筋組織はふとももの筋膜からとった。そのせいで、あたしのふとももの内側には目さくらさなくなてはわからないくらいい傷がある。でも、小学生のときにカッターで切った手の傷のほうがずっと目立つ。まぶたにあるはずの手術痕なんて探しても見つけれない。「まつ毛のラインでメスを入れるから普通はわからないよ」とさやちゃん先生は言う。

(3) なのに、お母さんとはときどきあたしのまぶたを見ている。明るい場所であたしが昼寝をしているとそつとのぞき込んでくる。寝顔じゃなくて、まぶたを見ている。その気配を感じると、すうつと眠りから意識が浮きあがってくる。太陽の光の下で、しらじらした照明の下で、まぶたに傷が

ないか、おかしいところがないか、お母さんが息を殺して探している。まぶたにそそがれる視線を感じながらあたしは寝たふりをする。

電車を降り、人の群れに流されないよう改札を抜け信号を渡る。スクランブル交差点のモニターから派手な音が流れてくる。キラキラした服やアイドルグッズを売る店が入っているファッションビルに背をむけて、大きなガラス張りのオフィスビルに向かう。透明な自動ドアが開くとエアコンの冷たい空気に包まれて、暑さと一緒にまとわりつくような騒がしさも遠のいた。エスカレーターに乗りながら息を吐く。途中の階で降りて、チエーンのコヒーショップをのぞいた。

スーツ姿の男性や女性しかいない。それぞれ打ち合わせしたり、スマホをいじったりしながらコヒーを飲んでいる。うるさい女子高生はいないから入りやすい。奥の壁際の席に水色のパジャマみたいな服が見えた。

さやちゃん先生だ。今日の昼間は手術の予定だったことを知っている。手術のあとは甘いものが欲しくなることも知っている。さやちゃん先生は青い上下の手術着のまま、クリームがもりもりのった紙コップを両手で包んでぼうつとしていた。ずうつと変わらない横顔。どこを見ているかわからない目。あたしよりずっとずつとおとななのに、由香里よりことに見えるときがある。

「さやちゃん先生」

横に立って声をかけると、さやちゃん先生はゆらつと頭を傾かせてあたしを見た。ぼんやりした目があたしをとらえて、顔がはつとこわばる。

「わ、もう外来時間？」

立ちあがりかけたさやちゃん先生の向かいの椅子をひいて座る。

「ううん、早くきたの」

リュックからだした炭酸のペットボトルに口をつける。もうぬるくなっていた。

「そっか、夏休みだから」

さやちゃん先生がほつとした顔をする。「よく灼けているね」と笑う。あたしが小学生のころは笑いながら頭を撫でてくれたけど、もうしない。

「朝と夜しか外に出ないからわかんなくなっちゃった」

さやちゃん先生はそうつぶやくと、入道雲みたいな飲み物から突きでたストローをくわえた。増量されたキャラメルソースが生クリームに沈み込んでいる。そのクリームもストローで吸おうとして、ずぼぼぼ、と変な音になる。あたしが笑うと、さやちゃん先生も恥ずかしそうに笑った。

結びきれずに顔の横に落ちた髪に生クリームがつく。頭のとっぺんの毛もほけほけしている。あたしがさやちゃん先生を撫でてあげたいな、と思

う。

思うけど、手はのびない。「じゃあ、あとで」とわざと明るい声で言っただけ。疲れているさやちゃん先生をひとりで休ませてあげたい。ここで休憩しているのを知ってから、あたしとさやちゃん先生はすいぶん親しくなったけど、やっぱりあたしはさやちゃん先生の患者なのだ。

96 「はい」と頷いたさやちゃん先生は眠そうで、でも声はおとなだった。

病院の入っているフロアは白い。ビルの上の階にあるから太陽が近いのか、いつも眩しい。待合室に向かうひろびろとした廊下は壁がぜんぶガラス窓なので、白い光の中にいるよう。

95 歩きながら目をして耳に集中する。あぶくの音がからだのうちから響きます。まぶたを透かして光が入ってくる。冷房がきいているのに熱を感じるくらい光。ああ、大丈夫だと安心する。② ケンサをしても、きつと大丈夫。

待合室にはかわいい色のベンチが並んでいる。でも、座るおとなたちの顔はけわしい。おとなのそばにはだいたい小さな子どもや赤ちゃんがいて、ぼんやりした顔をしている。休憩中のさやちゃん先生みたいな顔だと思う。自分の身におきることをただ受け入れるしかできない顔。

ここは特別なことも病院だから、あんまりあたしみたいにひとりできている子はいない。経過観察が必要な病気の子どもはおとなになっても通い続けるみたいだけど、高校生になっても子ども病院は嫌だとなあしは思う。でも、ここにこないとさやちゃん先生には会えない。ジレンマってやつだ。

100 診察券と保険証を受付に渡し、どのベンチにしようか見まわすと、大きなからだを③ チヂめるようにして田淵が座っているのが目に入った。やっぱり、と声がでる。半年前、ここで見かけた。ちょうど、あたしたちの学校が創立記念日で休みだった日だ。

田淵も半年に一度の通院なのだろう。もしかしたら、さやちゃん先生の患者なのかもしれない。胸がちりつとする。田淵はうちのクラスで一番背が高く、声も低い。あたしよりもおとなに近い。しかも、男子だし。

105 見ていると、田淵が顔をあげた。反応が遅れて目があつてしまう。気づかないかと思ったのに、田淵は口を「あー」というがたちであけた。仕方なく、近づいて「ぐうぜん」と声をかけた。

難しい病気が怪我の子しかこの病院にはこない。地方の病院では治療ができないと判断された子がここを紹介されてやってくる。都会にある

のは由香里が憧れるようなものばかりではないのだ。田淵はクラスでは健康そうに見えた。きつとあたしもだろう。だから、驚いた顔をしたのだ。

110 意外、とか言われたら嫌だなど思ったが、田淵は「俺、会計待ち」とだけ言った。さやちゃん先生の患者じゃないと知ってほっとする。

「へえ、早いね」と隣の明るいグリーンのベンチに座る。田淵の膝の上に本があった。半分が※モノクロ写真で、なにげなく見てきよっとする。顎がえぐれた男性の写真だった。下の歯はなく、ばらばらになった前歯が突きでている。口を閉じられないせいか、首はよだれで濡れていた。「びびるよな」

115 あたしの目線を追った田淵が言った。でも、本は閉じない。よく見ると、写真は※ブリクラのように連なっていて、次の写真ではチューブのうなものが顎につけられ、その次は顎のあった部分に瘤のように肉が盛り上がり、下唇ができ、最後は※ケロイドはあるものの顔の輪郭にそつた顎ができていた。

「これは第一次世界大戦の戦傷者の治療で、形成外科の本」

田淵が低い声で言う。

「せんしょうしゃ」

120 「戦争で傷を負った人のこと」

田淵がページをめくる。次の写真の人は顔の中央に穴ふたつのくぼみできていた。鼻がつくられていく写真が続く。

「うちのひいじいちゃんは、肩を撃たれた傷痕を名譽の星って言ってたらしいけどさ、⁽⁴⁾これは違うよな」

ひとりごとみたいに田淵が言った。どの写真も、人を人とも思わないような怪物に潰された傷に見えた。傷という言葉ではなまぬるい。なんだろう、と探して、欠損だと気づく。大きな欠けがからだにあった。正直、モノクロ写真で良かったと思った。

125 「キモとか言わないんだな」

「言えないかな」

田淵がこちらを見た気配がしたので、「なんでそんなの読んでは思うよ」と言った。

「あー」と田淵は頭をかいて、「医療ってすげえなって思ってた」と天井と照明以外なにもない上のほうを見た。「こんだけぐちゃぐちゃになっても治るんだと思うと安心すんだよね」

130 少し黙ってから、「そうだね」と答えた。

「俺さ、赤んぼのとき、火傷したらしくて手がこう、ぎゅっと握ったままくっついちゃったんだって。それをこでひろげて、腹からとってきた皮膚を移植したんだって」

ひらひらと手をふる。お父さんみたいに大きな手だった。

「だから腹に傷あんの。皮膚をとった痕。傷っていつても白い線だけど」

135 手術ってね、もう一度、傷をつけることなんだよ。

いつか、さやちゃん先生が言っていたことを思いだす。

「顔にも火傷の痕があつてさ」

「え、ぜんぜんわかんない」

140 初めてすっかり顔を見た気がした。田淵はにっと笑うと、「メイクで隠してんだよ」と言った。「メイクアップセラピストの診察受けにきてんだ」

「そんなのあるんだね、知らなかった」

「俺もはじめて言った」

田淵は本を閉じて背もたれにからだをあずけた。山のでっぺんに登ったような顔で伸びをする。

「俺は別に隠さなくてもいいんだけど、親がね、自分のせいだって思っちゃうからさ」

145 ぎくりとした。伝わった気がする。

それからほとんど喋らず、あたしはスマホでメイクアップセラピストを検索した。

会計に呼ばれると、田淵は「じゃ」と短く言って立ちあがった。最後まで田淵はあたしの通院理由を訊かなかった。

田淵がいなくなると、あたしはトイレにたった。鏡にうつる自分の顔を見つめる。目はひらいている。あたしのまぶたはさやちゃん先生がつくってくれたきれいな二重。

150 待合室を出て、白い廊下を走る。片腕を④ホウタイで巻いた五歳くらいの子があたしを見ていた。エスカレーターを降りて、むわっとした渋谷の街に立つ。

診察の時間まではあと十分ある。

(千早茜「まぶたの光」より)

※モノクロ写真……白黒など、単色で現像された写真。

※ブリクラ……写真を撮影し、それを印刷したシールを製造する機械。本文では、その機械で印刷されたシールをさす。

※ケロイド……赤く盛り上がった傷痕の一種。

問一——線①～④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線①「からだの重さ」とありますが、それは何を象徴していると考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 由香里に泳ぎを邪魔され、一瞬でも迷惑だと思ってしまったことに対する罪悪感。

イ 部活引退後、トレーニングに身が入っていない状況に対する歯がゆさ。

ウ 頭では楽しみにしていたつもりで診察の予定に対して、直感的に抱いた恐ろしさ。

エ 物事を先延ばしにしがちな態度を改め、着実に生きていこうとする覚悟。

オ いっとき忘れることができていた、学校生活をはじめとする現実のわずらわしさ。

問三——線②「またね、と笑って、更衣室のドアを閉めた」とありますが、このときの「あたし」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どれほど泳ぎに誘っても毎回断るくせに、自分の好きなことにはいつこく誘ってくる由香里に対し、いつもこちらが受けている仕打ちを味わわせようと、思いつく限りひどい拒み方をした。

イ 物事を深く考えることなく、人を傷つけかねない言葉を何度も口にする由香里に対し、このまま話を続けていたくないと感じ、今後の付き合いに支障をきたさないような形で会話を中断させた。

ウ 人を見た目だけで判断し、悪びれもせず平気で陰口を叩く由香里に対し、それはよくないことであると遠回しに何度たしなめても無駄だったので、より直接的にそれと分かる忠告をした。

エ こちらの発言の真意を理解しないばかりか、質問に質問で返すなど要領を得ない由香里に対し、「あたし」は由香里を見下しているのだと分からせるために、あえて皮肉めいた言動をとった。

オ 何かと話を恋愛に結びつけたり、流行に乗り遅れまいとしたりする由香里に対し、年齢相応のほほえましい話題に興味をひかれながらも、由香里とは距離をとりたい一心で明確に拒絶した。

問四——線③「なのに、お母さんはときどきあたしのまぶたを見ている。明るい場所であたしが昼寝をしているとそつとのぞき込んでくる。寝顔じゃなくて、まぶたを見ている。その気配を感じると、すうつと眠りから意識が浮きあがってくる。太陽の光の下で、しらじらした照明の下で、まぶたに傷がないか、おかしいところがないか、お母さんが息を殺して探している。まぶたにそがれる視線を感じながらあたしは寝たふりをする」とありますが、以下のやりとりは、ここでの表現に着目して、語り手でもある「あたし」の心情について、自由に意見を出し合ったものです。後のア、オのうち、明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「まぶたを見ている」を二度繰り返したり、「寝顔じゃなくて」とわざわざ断り書きを入れたりしている表現に着目しました。親というのは自分の子の寝顔をほほえましく眺めるものだという固定観念が、「あたし」にはあるのではないのでしょうか。そんな理想の母親像と現実の母親との落差に、割り切れない思いを抱いているのだと思います。

イ 「しらじらした照明の下で」は、たとえば「白い照明」や「明るい照明」でもよかったのではないかと感じました。わざわざ「しらじら

という表現が選ばれていることに、何らかの意味を見出せるのではないでしょうか。母親の態度を「しらじらしい」ものに感じた「あたし」が「しらけて」いる様子を表している、と捉えることもできるかもしれません。

ウ 「おかしなところがいいか」という表現を削つても文意は通じるのに、あえて挿入していることに注目したいです。「おかしな」を辞書で引くと「相手を軽蔑し、笑いをおぼえるさま」という意味がありました。健康上の心配ではなく、人に嘲笑されなかつた、いわゆる世間体を気にする母親に対し、「あたし」は違和感を覚えているのではないのでしょうか。

エ 「息を殺して探している」は、「息を止めて探している」や「息をひそめて探している」といった表現でもいいのにと感じました。「殺」という字面はほかの穏やかな表現よりもものしい感じがします。これは母親が本当は「あたし」を憎んでいることの暗示になつていて、そのことに薄々気付いている「あたし」が不安を感じているのではないかと思いました。

オ 「寝たふりをする」という表現が気になりました。「あたし」には起き上がつて母親をとがめるという選択肢もあるのに、そうはしていません。ここでの「あたし」は、自分の行為が娘にばれていないと思っている母親に、ある意味で協力しているといえます。「あたし」は母親に気を遣っているように感じました。

問五 — 線④「これは違う」とありますが、田淵が「違う」と感じるのはなぜだと考えられますか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問六 さやちゃん先生に対して、「あたし」はどう思っていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分にとつての恩人であるだけでなく、こどものような無防備さやどこか傷^{はな}げな姿が好ましく、医者と患者という立場にとどまらずにもっと親密になりたいと心を寄せているが、その実現は難しいだろうと理解している。

イ 手術によって視界^{めだ}を与えてくれたばかりか、こどものような無邪^{むじや}気さで雑談や相談に乗ってくれる姿が好ましく、医者としての模範^{もはん}を示してくれることに感謝しているが、今の自分には恩返しできるものがないと理解している。

ウ 時折こどものような振舞^ふいをするのはあっても、患者を前にすれば医者としての職責を果たそうとする健気^{けんげ}な姿が好ましく、信頼^{しんらい}のおける人物として尊敬しているが、自分はこのような人にはなれないと理解している。

エ 医者と患者という線引きを忘れないでいてくれるうえに、こどものようにどこか間の抜^ぬけた姿が好ましく、自分の母親に対して抱くのにも似た安心感を覚えているが、これ以上親密になることはできないと理解している。

オ こどものようにあどけない外見に親近感を抱く一方で、ふと医者としての疲れや憂^{うれ}いを見せる姿が好ましく、自分も早く年齢を重ねて対等な関係になりたいと願っているが、焦^{あせ}りは禁物^{きんぶつ}だと理解している。

問七 次のア～カは、この作品を読んだ生徒たちの感想です。本文の解釈として明らかな間違いを含むものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「光」は作中に何度も登場しているし、小説のタイトルに用いられている（153行目）ことから、特別な意味合いが付与^{ふよ}されていると考えていいよね。「光」を与えてくれたさやちゃん先生自身が、「あたし」にとつての「光」なのかもしれない。

イ でも、「一般的^{いっぱん}に最も明るい「光」を放つ「太陽」は本文に三度登場する（13、63、92行目）けれど、それらの使われた場面や使われ方を考えると、どうやら「太陽の光」は、「あたし」にはことさらに強いものとして感じられるみたいだね。

ウ 世界の「輪郭^{りんかく}がはつきり」（10行目）しすぎない程度の「光」しか受け付けないんだろうね。また、「ぼんやりした顔」（97行目）のさやちゃん先生を好ましく思っている「あたし」は、穏やかでのんびりした性格の人物なんじゃないかな。

エ 「ぼんやり」といえば「ぼやぼやと光にゆがむ世界」（9行目）が描かれた冒頭は、母親のお腹^{なご}の中を想起したよ。海は生命の母とも言うし、「光」がもたらされる前の原初状態としての水中が、結局「あたし」の落ち着ける場所なんだろう。

オ 水中にいるときに耳で捉えた「あぶくの音」（2行目）に安心を求めた場面（94～95行目）があったね。「光」は目で捉えるものだし、

「塩素のにおい」（9行目）、「肌にはりついた水着をはぐように」（44行目）など、さまざまな感覚に関連する表現があったよ。
水中での「あたしと水のさかいめが溶けていく」（2行目）という表現も印象的だった。全体を読み終えた後に改めて読むと、例えば「男子」と「女子」、「おとな」と「こども」、「先生」と「患者」といった、様々な「さかいめ」が扱^{あつか}われていたように感じた。

二 次の記事を読んで後の問いに答えなさい。

1205年、当時、興福寺の高僧^{こうそう}だった※解脱上人貞慶(ゲダツシヨウニンジョウケイ)という人が「興福寺奏状」という告発状を書いて朝廷に差し出した。ジョウケイはこの告発状の中で、ホウネンやシンランたちが強く推^おしているネンブツのあり方、つまり「ネンブツをとるだけ」でゴクラクにオウジョウできる」という「専修念仏(センジュネンブツ)」を批判した。この翌年からホウネンの教団「ジョウド宗」への弾圧^{だんあつ}が強まり、1207年に、ホウネンやシンランをはじめとする弟子たちが流刑・死罪となるのである。そのきっかけとなった批判文といえるだろう。ジョウケイは次のように書いたとされている(『吉本隆明が語る親鸞^{しんらん}』より引用)。

「本当の意味での念仏は、人間の心のなかに、念^{ねん}する心、※菩提心^{ぼだいしん}があつて、それが言葉になつて、※名号^{なごう}を称^{なづ}える、あるいは念仏称名としてあらわれるものだ。だから、念^{ねん}する心とか、菩提心とか慈悲^じ心というおおもとがそれぞれの人の心のなかにあつて、それが外にあらわれてはじめて、念仏称名の言葉になる。」

ところが、法然^{ほうねん}とかその弟子たちが言っているのはそうじゃない。あの人たちが念仏と言っているのは、ただ言葉だけで名号を称えればいいと言っているだけじゃないか。言葉で名号を称えさえすれば、誰^{だれ}でもわけへだてなく浄土^{じょうど}へゆけるみたいに言いふらしている。

言葉で名号を称えることと、仏教で言う本当の念仏とは違^{ちが}うんだ。もし、法然の弟子たちが言うことが正しいなら、口先だけで名号を称えればもうそれでいいことになるじゃないか。それは仏教としては墮落^{だらく}以外のなにものでもない」

実はホウネンのネンブツに菩提心がないと①キビしく批判したのは明恵(ミョウエ)なのだが、ここは吉本説にそつて進めてみる。みなさんはどう思うだろう。(1)ジョウケイが言っていることは、どう考えても1。そう思わないだろうか。

人間として、そのところの中に真に救われたいという思いがまずなければならぬ。真実の気持ち、真実の菩提心や慈悲心があつて、それが口から洩れ出^もてくるのがネンブツになるのだ。こころの底から「ナムアミダブツ」と思う、それがことばになってあふれ出すのがネンブツなのだ。そんな気持ちなどまるでなく、ただ口先だけの(ホウネンやシンランのいう)ネンブツに意味などない。そんなものは宗教でも信心でもないじやな

いか。

ものすごく説得力があることばだ。ぼくもそのことは認める。このことばに反論することは難しい。なぜなら、このことばは

1

からだ。

1

が故にぼくは深い疑問を感じるのである。

ジョウケイがいつているのは、簡単にいうなら「深く思うところが先にあって、その表現としてことばが出てくる」ということだ。あるいは「人間というものは、まず深く思うところが先にあって、その表現としてことばを出すべきものなのだ」ということだ。さらにいうなら、「あることについてなにも考えてもいないのに、もしくは、せいぜい思いついたぐらいなのに、ただことばだけを並べるのは、美辞麗句を連ねるのは、人間としておかしい」ということだ。

ここまで「翻訳」すれば、ジョウケイがいつているのは、単にネンブツの問題、単に「宗教」の問題であることを超えた、人間にとつての普遍的な問題についてだということがわかるだろう。

国語の問題に、ジョウケイのことばが取り上げられ、ジョウケイとホウネンやシンランたちのどちらが正しいのか問われたら、正しいのはジョウケイということになるかもしれない。それでも、ぼくはこのジョウケイのことばに強く抵抗したいのだ。なぜなら、この世界には「口先だけ」の分野があるからだ。

いうまでもなく、それは文学の世界である。

文学は口先だけのものだ。実はそれだけが、⁽²⁾口先だけのものであることだけが、文学をこの世で意味ある存在にしている。ぼく自身が文学というものに関わる者として、そのことだけは確信していえるのである。

なにか書くことが前もって明確にある。小説ならば登場人物のキャラクターや物語やエピソードが決まっている。テーマや構想が決まっている。そして、その決まったなにかを書き進めてゆく。まるで建築家が設計図にもとづいて建物を建てるように。あるいは、演奏家が楽譜にもとづいて演奏するように。みなさんは、文学というものはそんなふうに書かれるのだと思っているかもしれない。いや、もしかしたら、中にはそんなふう

に思いこんで書いている作家だっているかもしれない。

しかし、文学の「現場」では、そんなことは起こらない。もっと別のことが起こっているのだ。

なにかを前もって決めていたとしても、ひとたび「作品」を書きはじめると、ちがった景色が見えてくる。目の前にことばが現れる。それは自分で書いたことばなのに、まるで他人の書いたことばに思える。そして、その「ことば」に導かれるように、自分の中から未知の「ことば」が生まれ出てくる。それが、文学の「現場」で起こることだ。

だから、あらゆる文学は、その作者にとつて、どこへ向かうのかわからない旅になる。どのように力づくでねじ伏せようとしても、書かれたことばは、それ自身に意志があるかのように次の別のことばを探し求める。そうでなければ、文学に意味などないのである。

詩人たちはそのことをよく知っている。

2

もよく知っている。けれども、一見「設計図」があるように見える作品の作り手たちも

同じ経験をすることになるのだ。

偉大なことを考えるから偉大な作品を書くことができるのではない。自分の手の先から生まれたことばが、その作者を偉大な作品へ導くだけなのである。

【中略】

太宰治(ダザイオサム)という作家がいる。この国の作家の中でもとりわけて人気がある。もしかしたら、いちばん人気がある作家かもしれない。もちろんぼくも大好きだ。

ダザイオサムが好きだという読者に、その理由を訊ねると、こんな答えが返ってくることが多い。②ムカシからだ。そして、ぼくは、これも実に不思議なことだと思ってきた。それはこんなことばだ。

「彼の作品を読んでいると、まるでわたしのために書かれた作品のような気がしてくるんです」

ありえないというなら、これほど非現実的なこともないだろう。

有名な作家が、ある特定の読者のために書くなんてことはありえない。だいたい、その作家はその読者が生まれる前に死んでいるというのに。だから、そんな読者のことなど知るわけがないというのに。

※でも、読者のみなさんはもう気づかれているだろう。ここでも⁽³⁾「シンラン」に起こったことが繰り返されているのだ。

「ひとへに親鸞一人がためなりけり」

※アミダは「シンラン」のために誓いを立てたのではない。ダザイオサムは、どこかにいる誰かひとりのために『津軽』や『お伽草紙』や『斜陽』を書いたのではない。そんなことはわかっている。そんなことは「常識」だ。

けれども、「シンラン」はそうは思わなかった。「ひとへに親鸞一人がためなりけり」と思ったのだ。ダザイオサムの読者たちも「ひとへに自分一人がために」書かれたと思うのだ。では、なぜそう感じるのだろうか。

それは、「語りかけようとしている」からではないだろうか。

その点においては、アミダも作家も変わらないのだ。作家は読者に向かって書く。では、どんな読者に向かってなのか。それは現実の読者ではない。現実の世界にいる現実の人間の読者は、みんなひとりひとりちがつているし、そもそもそれがどんな人間なのか作家にはわからない。

だから、作家は想像するしかないのだ。ぼくは、目の前にいる、なにもいわずに黙って、ぼくから届くはずのことばを待っている読者に向かって書くことを想像する。

それでも、一対一の関係が生まれる。作家であるぼくには、作家としての名前があるだろう。けれども、この、なにかを書き送り届けるという関係の中では、⁽⁴⁾作家であるぼくにも名前はない。ぼくがことばを送り届けようとする読者にも名前はない。なぜなら、そこにいるのは現実の誰かではないからだ。社会の中で生きて、さまざまな関係の中で生きている誰かではなく、それらすべての関係から逃れ出した読者だからだ。

「非僧非俗」

もう一度、ぼくたちはこのことばに戻らなければならない。

「非僧」、⁽⁵⁾「僧侶」ではないもの。

「非俗」、「俗人」でもないもの。

大切なのは、「非」の一語だ。

「僧侶」であるのは、社会がそう認識し、当人もそう思うからだ。そして「僧侶」であるといえは、誰にだってその意味はわかるのだ。「俗人」もそうだ。「俗人」とはふつうの人、そこらにいる人、生きて死んでゆくすべての人びと。そして大切なのは、彼らはそれ以上突き詰めては考えないことだ。そんなことを「ふつう」の人は考えないのだ。でも、それは彼らが劣っているからではない。社会の中で生きるということは、考えることの大半を社会がやってくれるということだ。だから「ふつうの人」はほとんどにも考えなくてもいいのだ。その「ふつうの人」というあり方を受け入れることで、なんとか生きてゆくのだ。

けれども、「僧侶」や「俗人」に「非」のことばが加えられるとき、世界は変わるのだ。「僧侶」や「俗人」が、社会によって決められた役割なら、その社会から切り離されるのだ。そして、社会から守られることのないただの「個人」になるのである。

そんな「個人」だけが、そんな「個人」がことばをつむぎだすことだけが、「個人」と「個人」の間にある巨大な壁を越えて、ことばを届けることができるのだ。

少し長く書きすぎたようだ。ほんとうは「親鸞」が書いた『歎異抄』の、ぼくの「翻訳」を読んでもらうだけで、他にはなにも、どんな解説もいらぬのかもしれない。読者のみなさんがぼくの「解釈」を押しつけられているように感じてしまったなら、申し訳ないと思う。

ここまで書いてきたことは、ぼくが『歎異抄』という一冊の本に出会って感じたことだ。それはぼくだけが感じたことで、みなさんは、また自由によつてこの本に出会うべきなのだと思う。できうるなら、みなさんも自ら「翻訳」することで、『歎異抄』ではなく、みなさんひとりだけの『タンニシヨウ』に出会えると思う。あらゆる本は、いや人間が作るものはすべて、そのように「二対一」の関係の中で出会うべきものなのだから。

繰り返すことになるけれど、ほんとうのところぼくには宗教はわからない。なにか特定の神や超越的な存在を信仰することはないだろう。そういう意味では、ずっと無神論者でありつづけるのだと思う。

そんなほくでも「祈る」ことはある。自分を越えた存在に思いをめぐらすこともある。宗教的な感情とでもいうべきものが生まれることもある。

もしかしたら、「宗教」そのものには無縁でも、「宗教」が含まれているもの、「宗教」の本質の中にあるなにかには惹かれつつけるのかもしれない。いや、そのときには「宗教」ということはも不要なのかもしれない。

最後にもう一つだけとり上げたいエピソードがある。

キリスト教の世界で有名な「幼児洗礼論争」だ。それは膨大で複雑な論争なので、簡単に説明することはできない。けれども、ぼくが理解した限りで⁽⁵⁾このエピソードの一部を紹介しておきたい。

カトリック教会では長く「幼児洗礼」というものが行われてきた。まだ主体的とはいえない、信仰についての知識もない幼児や乳児に「洗礼」を行い、キリスト教徒にする儀式である。

長くつづいたこの習慣に対して、二十世紀最大の神学者カール・バルトが痛烈な批判を行った。その主旨は、「信仰とは神との一対一の契約であり、主体的な意志を持たない幼児に『洗礼』を行うのはキリスト教への冒瀆である」というものだった。

バルトの批判は正しいものと思った。キリスト教で神を信ずるということは、「神」と「個人」との、他になにも介さない契約であると考えられていたからだ。

みなさんは、ぼくがこれまでずっと、「一対一」の中で出会うことの重要性について書いていたことを覚えているだろう。社会の常識に反して、真の出会いとは、社会の属性を排したものの同士の「一対一」の出会いなのだ。

だとするなら、バルトのいう「神との一対一の契約」こそ真の出会いにふさわしい。はつきりした意志を持たない幼児を、大人たちや神父たちが無理矢理「神」との契約の場に引つ張りだすのは、宗教自身の自己否定になるのではないか。誰もがそう思った。

バルトのあまりにも「正しい」と思える批判に、敢然と立ち向かったのが、バーゼル大学でのバルトの同僚であり、キリスト教史の研究者であったオスカー・クルマンだった。クルマンは、バルトの「信仰とは神との一対一の契約であるという考え方」は素晴らしい、けれども「実のところ、それは信仰ではない」といったのである。

キリスト者、つまり信者は神にすべてを捧げる。それに対して、神は救済と魂の安寧をその信者に与える。それが人間と神との契約だ。もう一度いおう。それは素晴らしい。そこには個人の自立もあるだろう。けれども、最終的に、それは信仰ではないのだ。

キリスト教の信仰とはなにか。まず最初に神からの愛の一方的贈与があるのだ。まず愛なのだ。「幼児洗礼」とは、そんな神からの愛の一方的

贈与の純粹な形なのだ。見返りを一切期待しない純粹の贈与なのだ。それが神の愛なのだ。「信仰」とは、「神への愛」ではなく、まずなにより「神からの愛」なのだ。そう、ネンブツがアミダからの一方的な贈りものであるように。それは「愛の一方的贈与」なのだから、受けとることも拒否することも自由なのだ。③カリに拒否したとしても、神はそれを④ユルしてくださるはずである。クルマンはこう主張したのである。クルマンの視点からは、バルトの「神との一対一の契約」は、現世の論理そのもの、ぼくたちが生きている社会、とりわけ資本主義社会の労働の論理と同じものに見えたのだろう。

この「幼児洗礼論争」は決着がつかないまま終わっている。けれども、聡明なバルトにはクルマンの批判の鋭さがわかっていただと思うのである。

どう考えても正しそうなバルトの論理。けれども、正しそうなものには氣をつけた方がいいのだ。

(高橋源一郎『一億三千万人のための『歎異抄』』より)

※解脱上人……この世の迷いや苦しみからのがれ、安らかで自由な境地に達した、すぐれた知性をそなえた高僧。

※菩提心……仏道の修行をして、悟りを求めようとする心。

※名号……仏や菩薩の名。

※でも、読者のみなさんはもう気づかれているだろう……本文以前の箇所、ここで述べられる「シンラン」に起こったことについて、すでに

言及されたことをいう。

※アミダ……極樂浄土と呼ばれる世界にいて、生きるものすべてを救済する仏を「阿彌陀」という。

※冒瀆……神聖なものや清純なものをけがすこと。

※安寧……平穩で無事なこと。

問一——線①④のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二——線①「ジョウケイがいつていること」とありますが、それはどういことだと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仏教における念仏は、口先で称えるだけでは不十分であり、外に向けてわかるように称えてはじめて、本来の働きをする。
イ 最初から特別な考えがなくても、ふさわしい言葉を並べ、一心に念仏を称えるうちに、浄土に行くことができるようになる。
ウ 心の底から思うことが言葉となり、念仏となることで、それぞれの人のなかに菩提心とか慈悲心といったものが生まれる。
エ 思いつきの心ではなく、真実の気持ち、菩提心や慈悲心がある場合にだけ、ふと口に出る言葉が念仏と呼ばれるものになる。
オ 救われたという気持ちが念仏となってあらわれる時、それを口にした人は、自分が思っていたことの本当の意味を知る。

問三——線①に入る一語として最もふさわしいものを本文中より抜き出して答えなさい。なお、本文に三箇所ある1には同じ一語が入ります。

問四——線②「口先だけのものであることだけが、文字をこの世で意味ある存在にしている」とありますが、そういえるのはなぜですか。七十字以上八十字以内で説明しなさい。

問五——線③に入る表現として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ふつうの人」たち
イ 菩提心や慈悲心を持つ人々
ウ 即興演奏をする演奏者たち
エ 完全な建築物を作り上げる建築家たち
オ 現実の読者に向かって書く作家たち

問六——線③「『シンラン』に起こったこと」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「シンラン」が、ネンブツを、万人にではなく己^{おのれ}にだけ向けられた一方的な贈りものであると考えるようになったこと。
イ「シンラン」が、救いを求める多くの人に、自分のためだけに生きているありがたい高僧だと思われるようになったこと。
ウ「シンラン」が、無になって、ありがたいことを口にするうちに、人間にとって必要なものがわかるようになったこと。
エ「シンラン」が、ネンブツというものについて、師であるボウネンの考えを引き継ぎつつも発展させるようになったこと。
オ「シンラン」が、その影響力の大きさから、死んだ後になっても、まるで生きている者のように扱^{あつか}われるようになったこと。

問七——線④「作家であるほくにも名前はない」とありますが、それはどういうことですか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問八——線⑤「このエピソードの一部」とありますが、それに関する説明としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア乳幼児は自分でなにかを判断する力もそのための知識も持たず、「個人」として「神」との契約をかわすことができないので、「幼児洗礼」はキリスト教を傷つける行いである、とバルトは考えた。

イ宗教に身を捧げるはずの神父はまだしも、ただの大人までもが、抵抗できない乳幼児を無理矢理「神」の前に引っぱりだすので、「幼児洗礼」はキリスト教を否定する行いである、とバルトは考えた。

ウ「幼児洗礼」をめぐる、受け手が絶対に拒^{こは}むことができない、一方的な愛の贈与こそを信仰ととらえたクルマンは、「神」と「個人」における契約を信仰ととらえたバルトの考えに異を唱えた。

エ「幼児洗礼」をめぐる、神から贈られる愛に対して、すべてを捧げ、同じだけの愛を送り返す行^{こう}為を信仰ととらえたクルマンは、神との一対一の契約を信仰ととらえたバルトの考えに異を唱えた。

オすべての信者に対して神から与えられる救済と魂の安寧、および、すべての人間に対して神から贈られる一方的な愛に信仰の意味を見出したクルマンは、「幼児洗礼」を完全には否定しなかった。

カ人間から神へと向けられる愛ではなく、なんの応答も求めない、神から人間へと向けられる愛をキリスト教の信仰の根底に据^たえて考えた

クルマンは、「幼児洗礼」という儀式を否定しなかった。

問九 本文についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、仏教の世界におけるアミダと文学の世界におけるダザイオサムの間にある種の共通点を見出している。それは、両者とも、意図的に一度に一人の者に「語りかける」ことで、聞いている相手に「わたしのために」と感じさせるということである。

イ 筆者は、「非僧非俗」という言葉に見られる「非」という要素の重要性を指摘している。これは、ふだん当たり前とされていることの奥にある本質を理解するためには、すべての事象を一度否定しなくてはならないと筆者が考えているからである。

ウ 筆者は、本文のところでどこで人の名前やものごとをカタカナに直したりカギカッコでくくったりしている。これは、本文で使われている言葉を借りれば、いわば、筆者が人やものごとを「翻訳」して「一対一」の関係をつくる時があるからだといえる。

エ 筆者は、直接には仏教、間接にはキリスト教における諸問題を取り上げている。これは、「こころ」とことばの関係、あるいは、信仰における「神」と「個人」の関係を考察し、最終的には宗教それ自体を不要なものであると結論づけるためだといえる。

オ 筆者は、カトリック教会で行われてきた「幼児洗礼」に関するいくつかの立場からの見解を比較している。これは、宗教的と呼ばれる論理のいずれもが、現世の論理、なかでも資本主義社会の労働の論理と決定的に異なることを明らかにするためである。

(問題は以上です)



令和七年度
第2回

国語解答用紙

渋谷教育学園渋谷中学校

※らんには記入しないこと

受験番号				
				番
氏			名	

合 計 得 点	
---------	--



↓ここにシールを貼ってください↓



—
問一
①
②
③
める
④

問二

問三

問四

[illegible]

問六	
問七	

二
問一
①
しく
②
③
④
し

問二	
問三	

[illegible]

問五	
問六	

[illegible]

問八	
問九	

[illegible]